

コロナ時代のご奉公

収まりかけた感染者数が首都圏を中心に伸び始め、政府が強気で打ちだした Go-To トラベルも見直しを余儀なくされました。それでも経済優先で舵を切るのは、治療や感染予防のポイントが見え始め、死者数を比較的抑えていることが一因だそうです。経済回復は旅行・観光業界に限らず喫緊の課題ですが、そのために人が動くとウイルスも動きます。特效薬の普及まで、まだ、しばらくコロナと共存せねばなりません。ウィズコロナの新しい生活の確立は必至です。

ところで、コロナのお陰で感染症から人類史を見る本が注目されています。記録に残る「感染症が歴史を動かした」最も古い事例は古代ギリシアのペロポネソス戦争(BC431～404)だそうで、民主制を確立した先進都市国家のアテネが野蛮なスパルタに負けたのは、城壁の中に人を集めて疫病を蔓延させたため、これは天然痘か麻疹の流行と考えられています。この天然痘ウイルスがコロンブスのアメリカ大陸到達以降にヨーロッパから持ち込まれ、南北アメリカの免疫のない先住民が大きなダメージを受けたのもよく知られます。現在のメキシコに栄えていたアステカ王国では、数百万の人口の半分を失うほど感染が広がり、わずか600名のスペイン軍に屈します。現在のペルーに繁栄していたインカ帝国も、数百万の人口と強力な軍隊を擁しながら、わずか200名のスペイン軍に侵略を許すのです。

近くは百年前のスペイン風邪、即ちインフルエンザの流行も、第一次世界大戦の終結を早めたとされます。インフルエンザウイルスが発見される15年前ですから、各国は対応に慌てたことでしょう。

宗教も影響を受けます。東ローマ帝国を衰退させたペストは、ヨーロッパでは黒死病と恐れられて何度も猛威を振るい、歴史を大きく動かしますが、特に教会の権威が絶対的だった中世期の大流行は、多数の死者による人口減少が社会の構造を変え、教会の権威を失墜させます。この流れがルネッサンスの時代を興し、その一方で本物を求める宗教改革を生むのです。活版印刷の進化は聖書を普及させ、人々が直接教えに向かうようになって翻訳も進み、プロテスタントの台頭やイエズス会を通じたカトリックの世界進出へと繋がります。

日本史にも多くの感染症の爪痕があります。天平時代の天然痘の大流行では150万人が亡くなったという試算もあり、疫病対策として奈良の大仏や全国の国分寺等が建立されました。ちなみに奈良の大仏の建造費は、今の価格で新国立競技場の3倍の4657億円との試算もあります。社会状況の厳しさと、祈りの深さを感じます。

ともかく、コロナがこのまま終息に向かえば何よりですが、歴史に学べば今回の災禍は世界の風景を大きく変え、ご信心の在り方を進化させる契機になるかも知れません。そのためには、今まで学んできた功德行を、コロナの感染予防をしながらどう工夫し、実践するかということ、危機感を持って本気で取り組む姿勢が大事です。ご参詣の仕方、ご奉公の体制、ご供養の頂き方など、身近なことで結構です。コロナの性にして止めるのではなく、挑戦をするのです。